



未亡人の嫁
初体験相手の義姉

小日向諒／宮坂景斗

目次

一章	淫夜の姦事	喪服の兄嫁
二章	真昼の情事	エブロン姿の未亡人
三章	過去の艶事	洋喪服の義姉
四章	背徳の密事	兄嫁と義姉と交わって
終章	二人の美妻	

一章 淫夜の姦事 喪服の兄嫁

木の葉を色付かせる秋の涼風が、微かに開いたウインドウから車内へと流れ込む。昼間に細やかな秋雨が降っていた残余だろう。柔らかな水気を含んだ夜陰に頬を撫でられ、原田智也は微睡みから目を覚ました。

（いつの間に、眠ったんだろう）

アスファルトを駆け抜ける車体が後部座席を介して全身を微細に揺らす。エンジンの重厚な輪転が耳孔に鳴動した。

（妙に身体が鈍い……変だな）

四肢が奇妙な倦怠感に蝕まれ、胃を端に発して胸が赫々とした熱を帯びている。身体の異常に首を傾げる智也だったが、睡魔の靄がかかった脳裏はすぐに原因を突き止

められない。

（ああ、そうか……法要が終わった後、酒を飲まれたんだっけ）

たつぷり十秒ほど記憶を遡り、ようやく自分が置かれた状況を理解する。

（兄さんがいなくなつてから、もう一年……早いもんだよね）

実兄たる原田正隆が脳梗塞で夭逝したのが、今から丁度一年前だ。

今日は一周忌として親族一同が集ったわけだが、謹厳おとぎだったのは御斎おとぎまでで後は普通の酒宴と大差無い催しと化していた。

（陰鬱な雰囲気じゃないのは結構だったけれど、みんなして僕に構つていくのだから堪らない）

正隆の弟であり、出席者の中で最も若い大学一年生だったからだろう。年上の親族達は杯を片手に智也の前で入れ替わり立ち替わり、これからの就職・労働・結婚にまつわる含蓄と金言を滔々と述べていく。

父母に続き最後の肉親を喪つた未成年への、人生の先駆者としての深慮。

しかし、有り難い助言も積もり積もれば重荷となり、度重なる同情はやがて辟易を引き起こす。かといって、それが善意で行われているのだから、無下に拒否するののままならない。

妥協の末、次々と注がれる酒を無理に呷り智也は酩酊へと逃げた。だが、酒精摂取の経験に乏しい十九歳がアルコールの猛攻に耐えられるはずもない。帰路に就く車中で、智也はあえなく轟沈していた。

（そうだ、千紗ちさ義姉さんは――）

共に一周忌に赴いた義姉は――兄嫁の原田千紗は何処にいるのか。意思喪失の醜態を晒した挙げ句、千紗の現状を見失い智也は周章する。

もつとも、右往左往するまでもなく、右隣の座席では千紗が小さな寝息を立てており、智也は大きく安堵した。

（千紗義姉さんも僕と同じ……いや、それ以上に大変だったんだ。無理もない）

兄嫁は下戸とは異なる意味で酒精に頗る弱く、御猪口の一献で頬に朱を引かせてしまふ体質だ。そんな義姉が耳まで染めて酩酊しているのは、杯を手にした参列者達に喪主として誠実な応対をしていたからだろう。

（こんな時、僕が千紗義姉さんの負担を軽くしてあげなくちゃいけないのに）

智也は正隆の実弟だ。だからこそ、喪主である千紗を補佐し、義弟として支えてやらなくてはならない。血が繋がっていなかろうが未成年の十九歳だろうが、それが男に課せられた責務だと思う。

ところが、現実はいえば青二才に相応しく場に流され、己のことで精一杯になってしまっている。そんな自分に、智也は齒がゆさを感じずにはいられない。

（失敗したけれど……こんな近くで千紗義姉さんの寝顔を眺められる）

老舗の料亭というやや厳格な家柄に生まれついたためか、兄嫁は身内であろうとだらしない姿を見せない。毎日欠かすこと無く顔を合わせていても、千紗は智也の前でうたた寝一つした覚えが無い。

そんな義姉が、酒に吞まれたとはいえ無防備な貌を晒しているのだ。自身の不甲斐なさに憤りを覚えるものの、僥倖の絶景が智也の心中を悩ませる。

（千紗義姉さんって……本当に綺麗な人だよな）

蹉跌は次に改めれば良いと結論付け、智也は酒精の残滓を帯びた視界に未亡人の姿を捉える。

今年三十二歳となった千紗だが、その麗姿は七年前に初めて顔を合わせた時から何ら色褪せていない。むしろ、熟成を重ねた美酒宛らに女としての彩りを深め、輝きを増していた。

双眸を覆い隠した睫はマスカラを必要としない黒艶を帯びており、筆を引いたような柳眉は安眠によって静かにそよいでいる。年忌帰りということもあって化粧は頗る

薄く、白磁を彷彿とさせる肌理は桃色に透き通り、唇は紅い微熱を孕んでいた。

（ロングヘアも似合うけれど、アップにしているのも凄く似合っている）

平素は腰まで届く長い黒髪を流す義姉だが、法要では和装の出で立ちとなるため短く結い上げてある。翡翠の簪によって簡素に纏められたヘアスタイルは、彩色の絶たれた喪服と相まって酷く地味だ。

その一方で、千紗が生来持ち得ている美しさは、装飾を省いたことで鮮烈に輝く。夜陰が落とされているにもかかわらず、墨色の布地が対比したことで女肌はよりなめらかに映え、装飾の取り払われた容姿は千紗の純粹な美しさを際立たせた。

不定期に車内へ差し込んでくる街灯が、喪服の襟から覗いた白く繊細なうなじを照らし出す。

厳肅な礼服に身を包んだ義姉に妖しい艶を感じ、智也は慌てて目を逸らした。

（幾ら大好きな千紗義姉さんだからって、不謹慎過ぎる）

きつく脛を結ぶことで、智也は不意に迫り上がってきた禁忌の色情を振り払う。

兄嫁たる千紗を憧れの女性として捉えてしまっているのは、智也自身が何年も前から自覚している。

その叶わぬ想い自体は否定しない。智也にとって千紗は畏敬の対象だ。情欲を抱い

たとしても、兄の伴侶である限りは絶対に手が出せない。

叶わぬ恋心だと諦念したからこそ、逆に安心して妄想は妄想として割り切り、現実には現実として彼女を作るなりして、それなりの青春を愉しんでいた。

（兄さんの周忌なんだ。今だけはエロい想いは自重しなくちゃ）

幾ら千紗に色情を駆り立てられたとしても、時と場所には節度を持つ必要がある。両親を早くに亡くした智也にとって、正隆は兄ばかりではなく父の役も担ってくれた最も尊敬する男だ。そんな兄を追悼する日に義姉へ欲情してしまうのは、いくら何でも礼を逸している。

男の度し難い本性に憤然とするものの、智也の心情を無視して鼓動はより苛烈な早鐘を打ち始める。

これは酒がまだ抜けていない所為に違い——そんなもつともらしい理由を託けた途端、車が右折し脱力したままの女体が智也に寄りかかってきた。

（千紗義姉さんの顔が、こんな近くに……）

美女の上半体が斜めに傾き、智也の肩と密に接する。かくりと垂れた頭が目と鼻の先にあった。喪服越しに、三十二歳の肢体が柔らかな腕肉の感触を伝えてくる。

一拍を置いて「ん……」と、声の体を成していない吐息が、白く薄い喉からとろり

と漏れ出た。艶を帯びた可憐な響きが、智也の耳朶を赫々と染め上げていく。

ウィンドウの隙間から吹き込む秋風が、車中に微細な気流を作った。千紗の身体から白檀の甘い香りが巻き上げられ、大学一年生の鼻孔を蠱惑に擽る。

（戻すだけ……千紗義姉さんの身体を、元に戻す……ただ、それだけだ）

自分に言い聞かせるように胸中で繰り返し、腹の底から迫り上がってくる欲望を抑え込む。大きく唾を呑んで覚悟を決めると、座席に投げ出したままだった腕をゆつくりと千紗の肩へと伸ばしていく。

「智、起きた？」

千紗の頬に指先が触れようとした刹那、まったく予期していなかった第三者の声が、智也の心臓を跳ね上がらせた。膠で塗り固めたように体軀を硬直させ、唯一動いた首だけを回して声の出所へと視線を向ける。

「ね、義姉さん。何でここに——」

「何でって……あのね、これは私の車よ。持ち主が運転しているのは当たり前でしょう」

躍る心臓を抑え付けながらフロントを見れば、兄嫁の実妹にしてもう一人の義姉——小河原玲奈の双眸が、綺羅とバックミラーに反射する。千紗の妹に相応しい美貌の

持ち主は、ステアリングを切りつつ怪訝そうに眉を顰めていた。

「寝惚けているだけじゃなくて、相当酔っぱらったみたいね。智、具合は大丈夫？
気分は悪くない？」

「う、うん。ちよつと頭がぼんやりしているくらい、かな」

思考が鈍重となり平衡感覚がやや怪しいものの、酔いを発端とした頭痛や嘔吐感の類は兆候すら見えない。玲奈が懸念してくれた重篤の症状が皆無なのは、不幸中の幸いと言える。

もつとも、車は運転手によって走るという大前提を丸ごと失念し、千紗と二人きりだと思い込んでいたのは、さすがに重症と言わざるを得ない。

肉体だけではなく思考も酒浸りとなっている事実を目の当たりにし、智也は酔いの怖さを痛感した。

「はあ……もつと最初から義兄さんの周忌に行けてたら、姉さんと智に近付くうわばみ共を追っ払ったのに……ああつ、もう腹立つっ」

「あ、あのさ義姉さん。小河原の人達は僕のことを心配してくれてのことだから、その……あんまり責めないで欲しいんだ」

義弟を前後不覚に陥らせた親族へ悪態を吐く玲奈だったが、この為^{ていたら}体はそもそも

酔いに対する甘い見積もりが招いたものだ。

原因の一端ではあるものの、自分の甘さを棚上げにして親族達に玲奈の義憤を向けてしまうのは、何やら罪悪感を抱いてしまう。

（義姉さんって、千紗義姉さんと同じくらい綺麗だけれど……やっぱり、性格は全然似てないよな）

千紗の妹だけあって、玲奈も男なら誰もが目を奪われる美麗な容貌の持ち主だ。

切れ長の双眸を輝かせる如何にも美人然とした三十二歳と異なり、玲奈はやや瞳が大きく二十五歳とは思えない可愛らしさを無防備に振りまいている。長い艶髪を持つ姉とは異なり麗髪を肩に触れる程度の長さで切り揃えており、セミロングヘアのスタイリッシュな風采をしていた。

身長こそ姉より僅かに低いものの、腰の高さは殆ど変わらないため、玲奈の脚は抜群の美脚を誇っている。職業こそオフィスレディとあまり目立ったものではないにしても、モデルと詐称しても誰も疑わない。

（まあ、性格は全然方向性が違うんだけど）

誰もが納得する美人姉妹ではあるが、互いのメンタルを覗いてみれば、大和撫子もかくやと言わんばかりの淑やかな姉と違い、妹の気質は烈火の如く激しい。千紗を穏

やかな山間を流れる清流に喩えるなら、玲奈はいつ爆煙を噴かせるか知れたものではない活火山だ。

また、敬愛する姉と、血は繋がってはいないものの弟として可愛がつてきた智也への庇護欲は尋常ではなく、二人への害意には簡単に激昂してしまう。当人は冷静沈着な女を自称しているが、生憎と玲奈が千紗より冷静沈着だった瞬間を、智也は一度も目にすることがない。

取りあえず血の気の多い義姉から注意を逸らせるため、智也は適当な話題を模索する。

「ええと、そういえば義姉さん。年忌には随分と遅れて来たみたいだけれど、なんかあったの？」

「ん？ ああ、ちよつと仕事がトラブったのよ。義兄さんの一周忌だから最初からきちんと出たかったんだけどね。ごめん、智」

酒に吞まれかけていた智也だったが、玲奈が姿を現したのは御斎も終わりにかけていた頃だったと記憶している。義姉が参列することは事前に把握していたが、遅れる旨は一言も伝えられていなかったの、物を飲み食いしながら随分と気を揉んだものだ。

「私の上司、普段は怖いくらいできる人なんだけれど、今日に限って新人みたいなミ

ス連発したのよ。で、忠実で有能な部下が後始末をしていたってわけ……ま、終わらなかったから、明日も後始末するんだけど」

「そっか……ありがとう、義姉さん。仕事で疲れているのに、兄さんの周忌に来てくれて」

「もう、バカね。私達は家族なのよ。そんなの当然でしょ」

智也の謝意を玲奈は素っ気なくあしらう。だが、バックミラーに映る僅かな頬の綻びを智也は見逃さなかった。才色兼備の義姉だが、こうした隠し事の不得意な所ところはなんだかとても子供らしく感じてしまう。

もっとも、こんな感想を馬鹿正直に漏らせば怒られるのは火を見るより明らかなため、智也は胸中で苦笑するだけに留めておいた。

「年下の智が社会人の大変さを理解してくれるって言うのに……まったく、父さんってば、どうしてあんなに融通が利かないんだろう。こっちだって抜けられない仕事があるんだから遅れたって言うてるのに、この年になってもブツブツと——」

「い、いやほら、それは親として義姉さんが心配だから……じゃないかな」

好転した話題があまり芳しく無い方向へ転がる気配を察知し、智也はすかさずフオローを入れる。

姉の千紗や義弟の智也とは頗る親密な玲奈だが、実父とは少なからず確執があった。幸い、また玲奈の感情が下り坂へと差し掛かる前に車は原田家へと辿り着く。

一端停車させた後、玲奈は微調整も行わず見事なドライビングテクニクを披露し、玄関前へピタリと車体を横付けした。

「よおし、到着——って、智。何やってるの」

「何って、千紗義姉さんを起こさない」と

喪服越しに撫で肩を揺すっていた智也に「ああ、ダメダメ」と玲奈がひらひらと片手を振った。

「これだけ深酒していたら、耳元で金盃を叩かれても目覚めないのが姉さんよ。そんな起こし方じゃ、やるだけ無駄」

「でもさ、義姉さんの車をホテル代わりにするわけにもいかないよ」

千紗が起きるまで隣に付き添うのは吝かではないが、その為だけに玲奈の車を独占するのも気が引ける。何より、先程聞いた話によれば玲奈は明日も出社するらしい。そうなると、ますます千紗をこのままにはしておけない。

智也が懸念を表すると「何バカなこと言ってるのよ」と、玲奈は胡乱げに目を細めた後、あからさまな嘆息を吐いた。

「どうしても玄関正面に車を横付けしたと思ってるの。ほら、気分が悪いわけでもないんでしよう？ 私も手を貸すから、智が姉さんを背負いなさい」

憧れの兄嫁だからこそ、心身共に義弟として距離を保つ——そんな信条を固持してきた智也に、玲奈は簡潔ながらも苛烈極まり無い命令をあつさりと下した。

（ああ……とんでもない目に遭った）

堅苦しい礼装を脱ぎ、柔らかなTシャツとハーフパンツに着替えた智也は、脱力した膝をベッドに載せ、顔面から羽根枕に墜ちる。鼻先が僅かにひしゃげ、バウンドした視界が半秒ほど意識を途絶えさせるが、そんなことが瑣事に感じてしまうほど十九歳の肉体は過度のストレスによって疲弊しきっていた。

（千紗義姉さんをおぶることになるなんて……）

普通に考えれば、先の状況では臂力に優れる男子が酔い潰れた女性を運ぶのは必然の帰結だろう。その常識から導き出されるべき判断が、玲奈に言われるまで選択肢の俎上にすら載せられなかったのは、千紗と必要以上に触れないよう、智也自身が強烈な自制心を働かせていたからだ。

（千紗義姉さんの身体……柔らかくて、良い匂いがしたな）

時間にすればほんの数分だが、千紗を負った記憶は一生消えないだろう。

着物越しにも感じられた女の柔肉を思い起こすと、背筋にぶると淡い恍惚が蘇る。肩に力なく載せられた熟女の頤が、腕を伝って指先まで熱を持たせた。

はらりと流れた黒髪が儂く輝き、喪服に合わせた控えめのコンディショナーが仄かに鼻孔を撩る。酒精の甘くほろ苦い香りが、黒布の下で籠もっていた千紗の汗の匂いと混じりあい、目が眩むほど鮮烈な官能を煽らせた。

深雪を彷彿とさせる白い頬には酒気の紗がかけられ、三十路の熟した唇は紅く濡れていた。

（それに……千紗義姉さんの脚、凄く綺麗だった）

単に美人なだけではなく、千紗が男を悩ませる肢体の持ち主であることは、日常生活を通じて充分に熟知している。

三十路に熟した見事な女体も、厚い喪服で覆われてしまえば十把一絡げの婦女となってしまう。ところが、千紗を負った時だけは脚を開かせなくてはならないため、足首まで隠していた着物の裾が大きく乱れた。清楚な足袋を除けば、生脚といっても過言でもない三十二歳のふとももが、必然と剥き出しになる。

自宅に運ぶという名目の下、これまで触れたことのない義姉の脚肌を撫で、魅惑のふとももを両手一杯に掴めたのだ。

（あんな柔らかい脚……初めてだった）

枕に突っ伏していた頭を横倒しにし、千紗の肢体を支えていた掌をぼんやりと眺めた。

女のなめらかな身体が男の無骨な肉体と異なり、どれだけ柔らかで繊細なものかはよく知っている。これまで人並に彼女を作っていたし、セックスだって何度も経験していた。

それだけに、同年代の少女と三十路の未亡人では、女としての熟し方に雲泥の差を感じてしまう。

（むっちりと重みがあるのに、蕩けるくらい柔らかかなふとももなんて）

骨にまで焼き付いた三十路の肉感が、掌にふしだらな熱を蘇らせる。ふと巻き上がった淫欲が股間を炙り、勃起し始めた逸物がボクサリーブに押しつけられる。

智也は慌てて起き上がり、頭を振って脳裏に発生した危険な思い出を振り払った。

（酒が入っていると自制が効かなくなる……義姉さんが居なかったら、本当にヤバかった）

智也は大きく深呼吸すると、身体の中に溜まった不浄な熱と想いを吐き出す。

憧れの熟女と密着する——その狂おしいまでの誘惑を抑制してくれたのは、千紗の自室まで付き添ってくれた玲奈のおかげだ。当の本人は気付いていないだろうが、素面で理性を保っていたもう一人の義姉が傍らに居てくれたおかげで、あの禁忌で甘美な誘惑に負けずに済んだ。

まだ帰路の車中にいるであろう玲奈に、智也は心中で深謝する。

（これじゃ眠れないな……シャワーだけでも浴びてくるか）

こんもりと隆起したハーフパンツに視線を落とし、智也は暗鬱な溜息を零した。背中にはまだ千紗の感触が色濃く残っており、ルームウェアに着替えても白檀に混じった未亡人の甘い香りが肌に染みついてしまっている。

酒精の余熱もまだ身体の中で燻っているため、これでは横になってもいつ寝付けるとか知れたものでは無かった。

（ちよつと勿体ない気もするけど……いや、ダメだ）

千紗の余韻を排水溝へと流すなど、あり得ない暴挙だと色欲が喚く。そんな獣の声を無理矢理押し込めると、やや揺らめく視界と格闘しながら自室を出た。

物音一つしない冷えた廊下の照明を照らし、一階へと続く階段を慎重に降りていく。

普段は使いもしない手摺りも、念のためしつかり握って階下へと辿り着く。

居住者たる智也は慣れた手付きで壁に手を這わせ、廊下の照明を点灯させた。

一拍を置いた後に蛍光灯が明滅し、白い光が夜陰を払拭する。

「えっ——」

暗闇が残留したのではないかと錯覚させる、黒い塊が浴室へと繋がる廊下に縁取られる。刹那の一驚が過ぎると、喪服姿のまま床に倒れ込んでいた千紗のもとへと、智也は我を忘れて駆け寄った。

「千紗義姉さんっ」

大きく兄嫁の名を叫び、俯せになっていた女体を抱き起こす。残された唯一の家族といっても過言では無い義姉の有様に周章し、智也は大きく女の肩を揺する。

形の良い顔が力なく前後し、翡翠の簪が乾いた音を立てて床に転がった。

千紗の色艶ある黒髪がせせらぎとなって流れ落ちる。

「……智、君……？」

「ああ、良かった……千紗義姉さん、本当に……良かった」

何度か千紗に呼びかけると、やがてうつすらと未亡人の双眸が開く。死は常に身近に潜んでいると肉親の死を通じて痛感しているだけに、智也は心底安堵した。

それこそ、後数秒経っても反応が無ければ確実に救急車を呼んでいただろう。

（これなら……大丈夫そうだ）

酒精の余韻で朱がかかっていることを除けば、千紗の顔色に不安な兆候は見られない。痛みや苦しみとも無縁なのは、そのとろりとした瞳を見れば充分だった。

短時間で極端な緊張が身体を駆け巡ったからだろう。反動とばかりに、強烈な脱力が全身に襲いかかり、跳ね上がっていた心臓がゆっくりと鎮静していく。

「千紗義姉さん。どうしてこんな所に……」

「あの……喉が渴いて……お水を……」

明瞭を常とする千紗には似付かわしくない、断続した述懐が紅唇から紡がれる。

どうやら、智也が自室に戻った後に一旦目を覚まし、水を飲みに行こうとしたものの再び睡魔に襲われ、廊下で眠りこけてしまったらしい。

「待ってて。すぐに水持つてくるから」

季節が真冬でなく秋口であったことに感謝しつつ、智也は早足でキッチンへと踵を返す。やや大きめのグラスを取り出し、冷蔵庫からミネラルウォーターをなみなみと注ぐ。

「はい、千紗義姉さん。ゆっくり飲んで」

兄嫁に直接持たせるのはまだ危ないと判断し、智也はグラスの底を掌で支えたまま千紗の口元に持つて行く。女の織指がおずおずとグラスに触れると、小さな水面に波紋が生じた。

「ありがとう、智君……ん……」

酔ったまま寝ていただけあって、相当に喉が渴いていたのだろう。こくりこくりと小分けに嚥下していく千紗であったが、喉の蠕動はまったく遅滞しない。グラスに充たされていたミネラルウォーターは、みるみる体積を減らしていく。

紅唇から溢れた水滴が一筋の雫となり、頤を這って垂れ落ちる。慎みある喪服姿では許されないその乱れた光景は、流れ落ちた黒髪と相まって酷く淫靡なものに見えた。（千紗義姉さんに大事が無かったから……僕は不謹慎だ）

突発的に湧いた不安が雲散霧消すると、兄嫁の無防備な風采が直に男の色欲を煽り立ててくる。

酒精の悪戯で朱に塗られた白い頬。眩いばかりの艶を放つ濡れるような黒髪。

隙無く着込まれていた喪服はだらしなく緩み、歪んだ襟からは浮き出した鎖骨が見え隠れしている。しつとりと合わせられてた両脚は無気力に分かれ、裾からは長襦袢が露わとなっていた。

嬬やかなふくらはぎが剥き出しとなり、純白の足袋が木目の床にくっきりと輪郭を形作る。

「あの、千紗義姉さん。まだ、喉は渴いてる？ 足りないなら二杯目を持つてくるけれど」

未亡人から匂い立つ色気を振り払い、智也は女体から引き剥がした視軸を冷えたグラスへと合わせる。玲奈が不在の今、不埒な欲望を肥大させるわけにはいかない。

「ん……大丈夫……ありがとう、智君」

「それじゃ、早く部屋に戻ろう。まだ秋だけれど、こんな所で寝ていたら風邪を引くちゃうからさ」

この場から一刻も早く立ち去るため、智也はやや性急に千紗へ起立を促す。

「え、と……ん……んんっ……」

だが、智也の思惑とは裏腹に、酔いが足にまで回っているらしく、千紗は歩くことが立ち上ることすらままならなかった。

何度か身体を起こそうと試みるが、腕はとにかく脚がまったく言うことを聞かないらしい。膝が立てられては崩れ、その都度足袋に包まれた足先が床を拭く。

（千紗義姉さんに這って戻れなんて言えるわけないし……こうなったら、一気に背負

って部屋に運び入れるしかない——よな）

補佐役を務めてくれた玲奈こそ居ないが、幸いにして千紗の寝室は目と鼻の先だ。

先と異なり義姉の意識もあるので、運びやすいのも幸いだ。

息を止められるほどの短距離なので、千紗の濃密な色気が溶け込んだ匂いに惑わされる心配も無いだろう。

「ごめんなさい、智君……私、立てない……手、貸してくれる？」

「あ——ああ、うん。勿論だよ。任せて」

智也が段取りを整理する最中、千紗本人から直接助力が請われる。憧れの兄嫁から直に身体に触れて良いと許され、智也は僅かに声を上擦らせた。

義弟が首肯してくれたのが嬉しかったのか、千紗は柔らかく微笑むとゆっくりと両手を広げた。寝入っているのではなく、酔ってはいれど意識のある義姉を背負う緊張と興奮を自制しながら、智也は回れ右をして屈んだ。

「智君……そうじゃない」

「えっ——ご、ごめん。僕、何かまずいことしたかな」

柔和な千紗からは滅多に聞く機会の無い、不機嫌さを隠そうともしない非難。一体何が千紗の癪に障ったのかわからず、智也は戸惑いを隠せない。

「おんぶじゃなくて……だっこ」

直後に続いた千紗の頼みは、ただでさえ安定感を失っていた大学生の心を大きく揺さぶった。

（千紗義姉さんを正面から抱きしめるなんて……）

背中に負ぶっただけでも、敬服の至福と危険な劣情がせめぎ合っていたのだ。これがより密着感の高まる抱き方をしたら、それこそ胸が焼け付いてしまいかねない。

「ち、千紗義姉さん、だっこは、その……ちよつと」

「どうして？ 正隆さんは私をだっこしてくれたのに……智君は、イヤなの？」

凜とした顔立ちからはおよそ想像できない、幼子のような我が侏。伴侶を引き合いに出してくることを鑑みるに、やはり飲酒が相当に影響しているのだろう。冷厳な顔立ちからは想像し難い穏和で物静かな千紗だが、こんな子供じみた口調になったことなど一度も見ることがない。

潤んだ双眸には袖にされたと言わんばかりの悲しみと不満が溜め込まれており、義弟の拒否権を問答無用で剥奪した。

「わ、わかったよ。ちゃんと、抱っこして運ぶから」

智也が降参するや否や、千紗の表情がパツと輝いた。智也より遥かに酒が入った反

動なのか、千紗の感情表現は豊かを通り越して劇的なまでにくるくると変化する。

「それじゃ……一旦、身体を起こすね」

「うん、お願い……あつ——」

千紗の正面に膝を着くと、慎重に指を伸ばし女の腋へと通す。二の腕まで入り込ませて背中ではぐちりと掌を組み、手元へゆつくりと引き寄せる。

自分の身体があつさり持ち上げられたのが意外だったのか、千紗はきよとした眼差しで智也を見つめてきた。

（千紗義姉さんの瞳に、僕が映って……）

智也がこんな至近で義姉の顔に近付いたのは小学生の時以来だ。しかも、恋愛や性欲といったものが曖昧模糊としていた時分とは異なり、大学生となった今は千紗に如何なる想いを抱いているのか明確に理解している。

千紗の腕も智也の背に回され、女らしいあえかな織指がTシャツにしつとりと沈み込んだ。成り行きとはいえ、兄嫁から抱きしめられる至福と喜びに、心臓が無い踊らなばかりに脈を打つ。

（一刻も早く、寝室に運ばなきゃ）

無論、そうしたプラトニックな想いのみが沸き上がるだけでは済まない。並列して

駆け上ってくる劣情の滾りは、蒼い股間にじす黒い熱を籠もらせ、牡欲を注入された肉棒が禍々しく隆起してくる。自分の穢欲を未亡人に覺られないよう、智也は腰を僅かに引いた。

不格好な舞踏宛らに千紗を抱え、智也は足を踏み出す。

「ん……智君、もっとゆっくり歩いてくれるかしら……足が、付いていけないの」

「う、うん。気を付けるよ」

自重こそ支えられないが、智也に抱え上げられる形で助けて貰えば、千鳥足ながらも歩けるらしい。もっとも、智也は一分一秒でも早くベッドに辿り着こうとしているため、無意識に歩速が上がってしまう。

結果、千紗の足が付いていけなくなってしまったわけだが、問題はそれだけに留まらなかった。

（千紗義姉さんから、身体を押しつけられてる）

足早に動いた智也に応じようとしたのだろう。柔らかに背へと回されていた掌は、愛する男を希求するように強く指を立てた。胸元には白い頬が押しつけられ、零れ落ちた熱い吐息がＴシャツを簡単に浸透する。

黒髪から覗く義姉の小耳が酷く艶めかしい。しつとりと甘い吐息が肌へと染み渡り、

智也の欲情は益々昂ぶる。

（さつきよりも甘い匂い……一回呼吸しただけで身体が狂いそうだ）

艶を孕んだ濃密な芳香が鼻梁を蕩かす。真正面に密着した女体があるため、男を惑わす色香は負ぶっていた時の比ではない。四肢の末端まで官能が巡り、淫靡な毒氣が目眩を誘発させる。

（何も考えるな……考えるんじゃない）

胸中で呪文の如く自らに言い聞かせ、智也は兄嫁夫婦の寝室に足を踏み入れる。両手がふさがっていたため、壁に備え付けられたスイッチに肩を擦りつけた。

一拍遅れてルームライトが橙色の光を点灯させる。千紗を抱きながら一心不乱になつてベッドへと進んで行く。

（後少しだ……あと、ほんの少しの辛抱だ……）

見方を変えれば拷問に等しい時間が、ようやく終わろうとしている。心臓は胸骨が軋み上げるほど早鐘を打っており、膨大な血流を生み出して鼓膜に残響させる。

これ以上蠱惑の香りを吸うまいと呼吸を止めた。極限まで働く自制心が精神力を浪費させ、千紗を抱きかかえる肉体が猛烈な勢いで肺から酸素を筆り取っていく。

「あ——」

必然と、智也の注意力は散漫となり、平素では考えられないミスを誘発させる。千紗の身体が下方の視界を遮っていたのが災いし、ベッドとの相対距離を見誤ったのだ。本来なら停止する位置を超えて足が進み、兄嫁の膝がベッドの縁に接触する。自重ですら支えきれない女脚は簡単に重心を崩し、瞬く間も無く背中からマットへと落ちていく。

（しまった。これじゃ僕も一緒に――）

千紗から抱きつかれていた智也も一緒になって倒れ込む。己の失態に気付いた時は既に視界が急転していた。女体を押し潰すまいと咄嗟に腕を解くが、千紗は男の身体を離そうとしない。

ギシッ――二人分の体重を一気に受け止めたダブルベッドが、堅強な脚を軋ませる。「つつ……千紗義姉さん、ごめ――」

大切な兄嫁を結果として己の過失によって粗雑に扱ってしまった。忸怩たる思いで頭を垂れようとする智也だったが、謝罪の言葉は眼下に広がる光景を捉えた途端に途絶する。

黒い絹糸を彷彿とさせる黒髪が、清潔な白いシートへと展延していた。

隙無く着込まれていた喪服は乱れ果て、帯も緩んだのか押さえ付けられていた豊乳

が漆黒の着物を双曲に押し上げる。

裾に隠れていた襦袢が羞恥を投げ捨てるように捲れ、同年代の女子大生など比肩の対象にもならない、むっちりとした艶脂の乗ったふとももが半ばまで露出した。

（これじゃ、まるで……僕が千紗義姉さんと――）

寝台に横たわる女体の傍らには男の両腕が押しつけられ、着崩れた衣服からはなめらかな肌理が覗いている。

濡れた紅唇が薄く開き、潤んだ黒瞳には灯りが映り込んでいた。

三十二歳の未亡人を十九歳の大学一年生が組み敷く――動機はなんであれ、この情景は男女が交わる寸前のものだった。

（僕が……千紗義姉さんとセックスを――）

智也の脳裏で、何かが音も無く弾けた。

混沌としていた思考が、何年も醸成されていた禁忌の欲情に支配される。

理性が封殺されると、自傷じみた抑制から解き放たれた身体が一つの黒い激情に染め上げられていく。

「あっ――ん、ふっ」

何の迷いも無く、智也は兄嫁の紅唇を塞いでいた。

あれほど苦悶に苛まれていた時間がまるで幻だったと感じるほど、呆気なく千紗とのキスを果たしてしまう。

言動不一致甚だしいが、ここまで簡単に千紗の唇を奪ってしまったことに、智也は頭の片隅で酷く当惑した。

「ん……チュ……智、君……どうし……んんっ」

しかし、智也以上に周章していたのは千紗であるのは疑いようがない。兄を尊敬し、その妻たる義姉を慕っていた少年が、何の前触れもなく禁忌の行為に走ったのだ。

呆然から驚愕、そして抵抗に移り変わるまでは、酷く緩慢な時間がかかっていた。

その間に、智也は兄嫁の唇を陶然と堪能していく。

（千紗義姉さんの唇、なんて甘くて柔らかいんだ）

同年代の彼女達とのキスとはまったく質の違う、未亡人の爛熟した唇。甘い唾に浸された口唇を、丹念に甘噛みして揉みほぐす。とろりと溢れ出てくる兄嫁の涎を舌で掬うと、味蕾が溶け落ちそうな錯覚に陥った。

「んふっ、お願い……や、んっ……」

千紗は智也の胸板を押して抵抗するが、仰向けになった状態でのしかかった男を退ける力など、華奢な女にあるはずもない。酔いも邪魔をしてか、脚ほどではないにし

ても押しのける力などが知れている。

顔面くらいは引っ叩けそうなものだが、長年義弟として可愛がって来た影響か、痛くも痒くもない抵抗をするだけだ。

（唇はこんなに色っぽいのに、舌は小さくて可愛らしい）

未亡人の麗唇を一頻り堪能し、齒列の間から薄い舌肉を絡め取る。智也の舌肉を避けようとする千紗だが、それこそ狭隘な口内では逃げようがない。涎をたっぷり絡めた熟女の舌を掬い上げ、ねっとりと絡ませ合う。

ぬめりを帯びた温かな舌肉の感触が口内一杯に広がった。

（噛まれるかも知れないけれど、そんなのはどうだっていい）

まだ本番行為には及んでいないが、千紗の合意を得ていない以上、智也の行為は間違いない強姦だ。男に腕力での抵抗は無意味だと覚れば、深くねじ込んだ舌をいつ噛まれてもおかしくはない。

もつとも、そんな些細なリスクでは蒼く狂った衝動は止められない。仮に舌が血だらけになっても、一秒でも長く千紗と口腔を繋げ、憧れの義姉を賞翫していたかった。

「クチュ……んっ、はふ、チュ……んぐっ」

智也にとっては幸いなことに、無防備な舌肉は一切傷つけられることなく、兄嫁の

口内を蹂躪し続けられた。もとより義弟の顔面すら叩けない未亡人には、舌を嚙み切る野蛮な抵抗など思い浮かばなかったのかもしれない。

千紗は白い喉を反り返らせてか細く呻くものの、あえかな拒否しかできなかった。無抵抗に等しい三十二歳の唇を、智也は収奪し続ける。

（もっと千紗義姉さんを味わいたい……この身体を食りたい）

兄嫁との禁忌の口付けは、欲望を鎮めるどころかますます肥大していく。自制心が決壊し、義姉の貞淑を穢す大罪を犯しているにもかかわらず、智也は酷く自分が冷徹だと感じていた。

胸中から葛藤が消え、愛欲の衝動が心身を統合してしまっただけに、千紗を快楽に堕とすことに微塵も躊躇いが無い。

あらん限りの舌技を用いて女の歯肉を愛撫し、義姉の口内に無理矢理快美を沸き立たせる。過去の彼女達を絶頂に導くために習熟した愛戯を、三十二歳の未亡人に流し込む。

「智、く……んっ、あふっ……んんっ」

酔いの回った身体を懸命にくねらせ、未亡人は義弟の情動をいなそうとする。しかし、その合間には決して苦悶のみではない、甘い悲鳴が喉を波打たせていた。

（僕のキスで、千紗義姉さんが感じてくれている）

これまで何人もの彼女を抱く過程で磨き上げられた、肢体に官能を惹起させる牡としての性戯。その淫らな手管が熟れた兄嫁にも通じるという明瞭なる確信。

幾つもの欲に心を焦がされ、憧憬していた麗女が肉の快楽に悶える嬌態に、智也は悦びに戦く。

「あっ——や、あつ、もう駄目……ああっ」

義弟の淫行そのものが悪い夢だとばかりに、千紗は双眸をきつく結ぶ。だが、智也が着崩れた喪服と襦袢の間に指を差し入れると、信じがたい現実を見据えるように潤んだ目を見開いた。

（これが千紗義姉さんのおっぱい）

着物の上からでもわかる豊かな乳丘。襦袢越し感じられるブラジャーを介しても、掌が沈み込む柔らかさを感じられる。

「お願い、い……智君、脱がせちゃ……ああ、やあっ」

義弟が何を求めているのか、その手付きからすぐに読み取れたのだろう。すぐに乱れた襟を正そうとする千紗であったが、それよりも早く智也の掌が両肩に這い上がり、襦袢を掴んで一気に喪服ごと生肌を暴き出す。

二の腕の上半分まで着物を脱がせることで、千紗の両腕に著しい制約が課せられる。実質、これは両手の拘束に等しい。

「あぁっ、見ないでっ」

重苦しい喪服が取り払われ、秘匿されていたデコルテの全景が照明の下に晒される。襦袢に覆われていた純白のブラジャーは、厳粛とした喪服と対比して殊の外清廉に映える。刺繍に乏しく、飾り気の少ないフルカップブラには、セクシーな趣は希薄だ。代わりに、漆黒の喪服と相まって混じり気の無い美しい美しさが醸し出されていた。

（大体のサイズはわかっていたけれど、本物は想像していたよりずっと巨乳だ）

兄嫁と共に暮らしていても裸を見る機会などは無かったが、男の視線を釘付けにしてしまう乳房は、衣服の上からでも充分に偉容を見せつけていた。

そもそも智也は家族の一員だ。洗濯されたランジェリーくらいは千紗に代わって取り込んだことくらいはある。

ブラを手に取りカップサイズを把握していたつもりだったが、肉眼で見る生の乳房は圧巻だった。

「ひっ、あぁ、ん……胸、揉まな——ん、くうっ」

千紗の嘆願を右から左に流し、乳房を保護しているブラの隙間に指を滑り込ませる。

見かけと寸分違わないポリウムのある乳肉が、男の手をとつぷりと沈み込ませた。

（今まで揉んだおっぱいと比べても、断然に揉み応えがある）

小振りのメロンに等しい乳房は、千紗の意思とは無関係に形を変えて柔軟に男の愛撫を受け入れる。この巨乳にはあまりにも窮屈な着物へ長時間押し込められていたためだろう。温かな乳房は発汗によって湿っており、繊細な肌理は智也の指先にびったりと吸い付いてくる。

乳房から揮発したのか。美熟女の甘い香りを孕んだ、生暖かに湿った汗の匂いが大学一年生の鼻梁を擦った。

「やっ、だ……こんな、見えちゃう……あぁっ」

フロントホックではなかったたので、撫で肩にかかっていたストラップに指をかける。女肌を滑らせて上腕の頂きを越えさせると、ピンと張っていた白紐がふわりとほどけた。

はち切れんばかりの乳房からカップが離反し、豊丘の全貌が露わになる。

（千紗義姉さんが、こんなエロいおっぱいの持ち主だったなんて）

柔らかな双丘の頂に添えられ、純白の雪肌に垂らされた鶺鴒色の突起。そのあまりにも鮮やかな色合いに、獣となっていた智也も時を忘れて凝視する。

丘というより最早玉に近いサイズの艶胸だが、乳輪は小さく控えめだ。汗で湿っているためだろう。爛熟した突起はぬらりとした輝きを帯びており、慎ましやかな乳首とは思えない蠱惑を醸し出している。

「はあ、んっ。智、君……やめて、弄らな——んっ、ああんっ」

たつぷりと掌で熟乳の柔らかさを堪能した後、指先でツンと鮮やかな突起を摘んだ。先端をじつくりと扱き甘やかに乳頭を圧搾すると、千紗の喉が艶やかに乱れた。

キスの途中に漏れ出る甘い吐息ではない。性感を鋭く突かれることで噴き出した、紛れもない嬌声。

（これが千紗義姉さんの喘ぎ声……ああ、なんて甘い音色なんだ）

憧れの義姉が奏でる官能の音色が、智也の耳朶を淡く痺れさせる。鼓膜が歓喜に震え、蕩けるような甘美に意識が浸った。

千紗の牝性が溶けた鳴き声は肉棒をよがり狂わせ、ハーフパンツの中で獣性の先走り噴き出させる。

「ああっ、形が変わっちゃう。ふう、んっ……ああんっ」

蕩けるような半球を掌で存分に賞翫する。まろやかな乳肉は千紗の意思に反し、義弟の為すがままなめらかに躍動した。

時計回りに円を描いて乳房をこね、不定期にアンダーから掬い上げる。小指から順に指を握り、乳首を頂点にして柔らかに搾り上げると、充血した突起がぷっくりと膨らんだ。

パンパンに膨満したところで親指を直上から押しつける。ぐりぐりと圧搾するように躡ると、千紗の背が弓なりに跳ね上がった。

ほんの一瞬だがベッドから上体が浮かび、落下した女体を支えた木の脚がぎしりと耳障りな音を立てて軋む。

（こんな巨乳なのに感度も良い）

これまで付き合った彼女達は、性感の乏しい者が少なからず居た。智也の彼女は大半が同年代であり、中にはバージンだった少女もいたため、必ずしもセックスを愉しめたわけではない。

そうした前例を経ているため、兄から充分に開発されていた未亡人の敏感さには、驚きと感動を禁じ得ない。

「ああっ、私どうしてこんな、はしたない声を……あんっ」

もつとも、女体を駆け巡る性悦はすべて千紗の感度故とするほど、智也は牡として腰抜けではない。まだ大学一年生だが、肉体関係を持った女の数はかなり多いし、経

験を通して女を開発する手腕は向上している。

これまで錬磨してきた淫戯を、全力で千紗にぶつけているのだ。義弟から力尽くで愛撫されているとはいえ、義姉の身体が女の反応を見せてしまうのは必然だろう。

千紗は聡明な女性だ。平素ならば、その反応を立ち所に理解し、冷静に対処してしまう。そうした理合すら汲み取れぬほど、兄嫁の思考は酒に蝕まれているらしい。

「んふっ、こんなキス……ああ、ふ、あ……クチュ、んふっ」

双乳を揉みしだいて女体を悦楽で炙ると、再びキスの攻勢へと切り替える。巨乳を弄くるのも心地良いが、智也はキスで女を蕩かせるのを好む。

口腔に反響する唾液の攪拌。鼻梁同士が擦れ合うくすぐったさ。何より、どろどろに密着した唇から伝う女の味を吸るのが堪らない。

（着物はどうやって脱がせればいいのか、よく分からないな）

女を抱きながら服を剥いていくのは簡単だが、今回ばかりは手が止まる。女子高生の制服を剥ぎ女子大生の下着を脱がせた経験は多々あるが、着物にはとんと縁が無かった。脱がせる以前に、構造がよく分からない。浴衣程度なら難なく脱がせられるが、着付け帯が用いられた和喪服となるとお手上げだ。

（脱がせるのは無理だけれど、セックスに支障はないか）

千紗を全裸に剥くのは骨が折れそうだが、局部をはだけさせるのは楽だとわかる。濃密な舌戯で兄嫁の意識をキスに集約させ、その間に熟乳を搾っていた手をそろりと下降させていった。

淫行には不釣り合いな喪服に、卑猥な欲情に駆られた指先が這う。裾の隙間に爪をねじ込ませ、女の秘密が隠された恥丘へと手を伸ばして行った。

「あっ——だ、駄目っ。そこは駄目よっ」

いくらキスで幻惑していても、さすがに股座に異物が入り込めば気付かざるを得ないのだろう。悪戯や淫行の類では済まされない、未亡人としての貞淑に危機を感じたのか、千紗は両脚を内に折って拒絶の意を示した。

もつとも、自重も支えられないほど酔いが脚に回っているのだ。健気な拒絶だったが、智也が僅かな力で外にふとももを押しのと、むっちりとした媚脚がだらしない股座を露わにしよう。

その無力さは憐憫を誘い、智也の牡としての嗜虐心を心地良く擽った。

「お願い、智君。もうこれ以上は——ああっ」

千紗の言葉は大きく捲り上げられた裾によって中程で断絶する。両のふとももに端布のようにかかっていた喪服を襦袢共々に払い落とし、足袋を履いた白い美脚を下腹

まで一気に露出させる。

（下は白のショーツか。千紗義姉さんには見合っていない地味さだけれど、逆にエロいよな）

ブラと並んで飾り気の希薄なショーツは、美貌の未亡人には不釣り合いなまでの控えめさだ。顔立ちもさることながら、インナーモデルをやっても何ら違和感の無い艶美な肢体には、派手なくらいでようやく調和が取れると智也は思う。

一方で、シンプルなショーツは逆に肉感豊かな三十二歳の肢体を際立たせる。艶脂が溶け込んだ肌に、柔肉を押しつけてぴっちり張り付いたショーツは、これまで抱いた女達が穿いていたどのショーツよりもセクシーなものとして、智也の脳裏に焼き付けられた。

「わ、私たちは義姉弟なのよ。こんな淫らなこと、許されないわ。いつもの優しい子に戻って。お願い、智君っ」

女の艶脚をふしだらに割り、身体を深く沈めていた智也に、最後の希望とばかりに千紗が嘆願する。乳房から注がれた性感によって呼吸が乱れ、キスによって蕩けてしまった頬は恥じらいの朱に染まっている。

双眸に湛えられる濡れた輝きは、不如意な恥辱と不義の快楽——そして、義弟に強

姦される悲しみによって、今にも溢れださんばかりだった。

「僕にこんな真似をさせたのは、千紗義姉さんじゃないか」

智也にとって、兄嫁は憧れの女性だ。そんな女を泣かす者がいたとしたら、喻えそれが伴侶たる兄であろうとも喰ってかかっただろう。

まして、千紗を悲しませているのが自分だったら、床に頭を打ち付けて詫びている。

「この世で一番大切な女なのに強姦を唆せたのは、千紗義姉さんじゃないか」

「とも、君——」

兄嫁を襲ってからようやく紡がれた、智也の肉声。

聞き慣れた義弟の声ではない、酷く平坦で抑揚の無い喋り方に違和感を覚えたのか、千紗の瞳が狼狽にたじろぐ。

「兄さんの妻だから、我慢していたんだ。自分に言い聞かせて、諦めさせて、絶対に手を出さないって僕は誓っていたんだ。それなのに——」

智也は僅かに上体を起こすと、今更隠す必要もない怒張を覆うハーフパンツを前に突き出す。布地を食い破らんばかりに屹立した欲棒を、自身の色艶がもたらす影響についてまるで無自覚な義姉に顕示してやる。

「そんな……私が、智君を……」

女とは言え千紗は未亡人だ。伴侶があつた身であればこそ、男の度し難い生理について理解しているのだろう。義弟からレイプされそうになり、あえかに狂瀾させていた手足から力が抜けていく。

窮屈に隆起した股間を見つめた未亡人は、ここにきて初めて自分が無意識に義弟の犠牲を煽り、苦しめていたとわかつたのだろう。美麗な眉を痛々しげに歪ませ、智也を見つめる黒瞳にはあからさまな動揺が滲んでいた。

「僕を散々苦しめておきながら、自分に非がないような言い方するなんて、ずるいよ」

千紗の罪悪感を充分に煽った智也は上体を引き起こすと、肉欲を圧殺していたハーパンツを片手で下げる。押し込められていた反動とばかりに、極限まで膨満した精棒が勢い良く反り返った。

「あっ——」

義弟の瑞々しい生殖茎が全容を見せた途端、千紗の瞳が大きく見開かれた。

「千紗義姉さんのせいで僕がどれだけ辛い思いをしていたのか、これを見ればわかるよね」

兄嫁の驚愕した視線が股間で焦点を結ぶのを感じ、智也は頗る満足する。

臍に迫らんばかりに長く突き立つ、猛々しい砲竿。肉茎には興奮によって浮き上がった血管が這い回り、禍々しい文様が施されている。

鋭利なまでに反り返った肉傘は兜宛らに広がり、雁首は肉樹に陰を落としている。

卑樹の根本には無数の皺が重なるずっしりとした精囊がぶら下がっており、不規則にひくひくと膨張と伸縮を繰り返す。

（兄さん並のデカちゃんぽだから、千紗義姉さんも驚いたみたいだ）

亡き兄はおよそ巨根と称しても過分ではない男性器の持ち主であったが、弟である智也も引けを取るわけではない。平時は蜷局^{とぐろ}すら巻く長大な凶根はかつてないほどに滾り、肉の槍となって天を突いている。

精囊が不随意にぶると震えた。鈴口から漏出していた先走りが更に湧き出された。透明な我慢汁が裏筋を伝って竿腹を下り落ち、精囊の途中で糸を引きつつ滴る。

牡の情欲が溶け込んだ淡精が、千紗の白いショーツに淫らな染みを穿った。

「大人なら、きちんと相応の責任を取ってくれる……そうだよな？」

「せ、責任って——んっ」

恥丘に被せられていた純白のショーツに指先をゆつくりと沈めていく。

クロッチの上から女裂に爪を立て、優しく穿ると「ああっ」と千紗が甘い苦悶を奏

でた。快樂から逃れようとした女体が反射的に脚を閉じ、股座から沸き上がった快樂を押し止めようとするが、間に割っている智也の脇腹を圧迫させるのが精々だ。

「千紗義姉さんだって未亡人なんだから、わかっているはずだよ。勃起したちんぽを鎮めるのは、女のまんこの役目だって」

「やつ、そんな……んんっ」

裾に縁取られた僅かなレースに爪を引っかけ、純白の薄布を脇へと除ける。ぴったりと股座に密着しているショーツは、自らの役割を放棄するようにあっさりと思智也の指に付き従い、女の秘唇を暴き出していく。

（これが、千紗義姉さんのおまんこ……綺麗なのに、なんていやらしいんだ）

兄嫁の恥部を初めて目し、智也は陶酔に似た感動を覚える。

三十二歳の熟れた女陰はふくらと厚みを帯びており、智也がこれまで抱いてきた女子高生や女子大生とはまるで様相が異なっていた。

十代特有の瑞々しさなるものは無いが、女としての爛熟を果たし男を招き寄せる術を心得た、匂い立つ艶を秘唇に宿している。それでいて淫らな花卉は不埒に咲き乱れることもなければ、猥雑な色合いに染まることもなく、美麗な風貌に違わぬ清らかな彩りが添えられていた。

淫花の妖しげな芳香が、淫らなパフュームとなって立ち上る。

「わかっていなくちゃ、こんなビチャビチャに濡れている理由なんて説明できないよ。違う？」

「う、嘘……私が、こんな……ひうつ」

智也が中指を浅く挿入し、入り口付近でくちゅくちゅと弄ると兄嫁は甘い悲鳴と共に鼠蹊を妖しくくねらせる。

薄く開いた牝口からは、男に抱かれるに足りる量の愛蜜が、もう隠しようが無いまでにたつぷりと溢れ返っている。

もっとも、これは千紗が心を許したわけではないのは明白だ。智也の言い分など所詮は詭弁の類であり、秘華がしとどに濡れているのは単に入念な前戯で女体を発情させたからに他ならない。

（想像よりちよつと……いや、かなりほぐれてる。酒のせいか……あるいは千紗義姉さんが殊更敏感な体質なのか）

千紗の発情ぶりは内心驚くべきものだったが、当の兄嫁は義弟の心境に気付く素振りはない。未亡人として許されざる恥辱を受けておきながら、淫蕩に義弟の逸物を呑み込む準備をしている自分の身体が信じられないのか。牝汁を滴らせた指先を智也が

掲げると、憐憫の情さえ湧き上がる動揺が美熟女の双眸を見開かせる。

（あの千紗義姉さんがこんな顔をするなんて）

兄が亡くなり未亡人となっても、悄然としたことはあれど泣き顔は決して見せたことはない。そんな義姉が、触れれば壊れてしまいかねない紅く儂い唇を震わせている。初めて見る千紗の女としての脆弱さが、智也の牡を快美に刺激した。

「ち、違うの智君っ。これは——ひっ」

膝を広げて重心を下げ、秘唇に鈴口をびたりと吸い付ける。鈴肉から発散させられる欲熱を粘膜越しに感じ取ったのだろう。千紗の喉が声帯を窄めた。

「お願い、許し——ああっ」

義弟の強姦を論そうとする最後の嘆願は、ずつぷりと侵入した亀頭によってあえなく散らされる。夫以外の男性器が膣へ挿し込まれたのがよほどショックだったのだろう。三十二歳の未亡人は悲鳴はおろか声にすらならない、細い吐息を漏らした。

（僕のちんぼが、千紗義姉さんのまんこを犯していく……ああ、最高だ。すぐにでも射精しちゃいそうだ）

未亡人の貞淑を義弟によって穢され、千紗は声を失う。その一方、憧れの義姉に己の卑肉をねじ込んだ智也は、かつて無い達成感と悦楽を得ていた。

別段入れ込んだわけではない彼女達と性交に耽った時とは、まったく異なる快絶。どんなに惚れ込んでも決して手を出せなかった、アイドルを汚辱するに等しい悦び。強欲に科せられていた枷が弾け飛んだ分、牡のサディスティックな悦びは智也の全身を快美に戦かせる。身体中の毛穴が開き、四肢の末端まで肉の喜悦が駆け巡る。（絹みたいに白くてスベスベの肌なのに、まんこは今までセックスしたどんな女よりもエロい）

雁太の先端をずつぷりと嵌め込むと、甘く蕩けた淫褻がねつとりと鈴肉を包み込む。三十二歳の練熟した女肉は千紗の意思に背き、本能に従うまま十九歳の卑肉をぬぶりと啜え込んだ。雪の白さを帯びた餅肌のおともが、ビクリと豊満な脚肉を震わせて痙攣した。足袋に覆われた足首がキュッと折れ曲がる。

千紗を犯す穢れた喜悦が、痙攣じみた震えを肉茎に走らせた。猥汁が貯えられた精囊が、噴き上がる愉悦にひくひくと啜う。

「ああっ、智君、駄目ッ。おちんぼ、これ以上入れないでっ」

この期に及んでもまだ未亡人としての貞淑を諦観できないのか、千紗は四肢の自由を封じられながらも肩を振る。鼠蹊を捻って必死の抵抗をするものの、怒張が女体を貫いているのだから何ができるはずもない。

むしろ、仰向けになった肢体が波打つことで、男根に絡む蜜爰は淫らにうねり、単なる挿入だけに留まらない悦美を生み出す。智也は括約筋をきつく搾り上げることで、不意に襲ってきた肉悦の波を乗り切る。

（千紗義姉さんも、おちんぼって言うんだ）

性悦の煽情は肉欲のみでもたらされるわけではない。美麗な兄嫁が紅唇で紡いだ男性器の俗称は、それだけで不埒な悦びを智也の耳元で唆す。

同年代の女子達と同じ言葉を連ねても、さしたる感慨を抱くことはない。

千紗だからこそ、憧憬の義姉だからこそ、童貞だった頃のように卑語の一言でも性欲を掻き立てられる。

「僕のちんぼってデカイから、初めて挿入する時って大半の女の子がビクビクするんだけど、千紗義姉さんって犯されたくないって割りにはすんなり啜え込んでくれるね。未亡人だけれど、凄くエロいまんこだ」

「ち、違うわっ。私は正隆さん以外には——ああんっ」

智也としては兄が亡くなり、男日照りであったのに巨大な逸物を苦もなく呑み込む三十二歳の蜜路を褒めたつもりだったが、千紗は別の捉え方をしたらしい。

未亡人なのに義弟のレイプを歓待しているとでも言葉尻から歪曲したのか。貞淑な

義姉は見当違いの潔白を訴えるものの、智也が凶根をより深く嵌め込むと喉を反らせ、雪肌のももを喘がせた。

（爰一つ一つがべっとりちんぼに吸い付いてくる。まんこの中で融かされそうだ）

太い血管の張った竿腹に、柔らかに熟れた媚肉が這い回る。十代の少女とは異なる、じつくりと女としての彩りを深めていった爰の感触が、十九歳の獣悦を頗る満足させた。

亀頭を押し込むごとに、みっちり肉柱に吸い付く淫口から蜜蜜がどぷりと漏れる。女の熱が溶け込んだ愛液が精槍を浸し、卑猥な温かさが牡の股座を恍惚に蕩かした。濃密な牝の匂いが揮発し智也の鼻孔を灼く。淫靡な香りに触発され、心臓が大量の血液を下腹へと流し込んだ。

「ほら、あと少しだよ千紗義姉さん。僕のちんぼ、一気に呑み込んで」

「んっ、あっ——く、ふうんっ」

じりじりと女を味わう挿入をしていた智也だが、最後はズンッと勢い良く肉茎の根本まで突きいれる。男と女の股間が卑猥な融合を果たした。硬く張った鈴口で膣の最奥を押し上げ、まだ子を孕んだことのない真新しい揺籃を振るわせてやる。

「わかるでしょ。僕のちんぼ、先端から根本まで全部千紗義姉さんのおまんこに入っ

てるって」

女体の牝芯を直に揺さぶってやると悦肉を颯られた未亡人は「んうっ」と、喉の奥からくぐもった艶鳴を漏らす。

足袋に包まれた足首がピンと伸ばされ、白い布地に包まれる足指がキュッと丸められた。年上の兄嫁が見せるあえかで可憐な痴態が、智也の尾骨を快感に疼かせる。

「はあ……はあ……本当に、智君おちんぼ……おまんこに入って……」

これまでの抵抗がまったくの徒労に終わったと覚ったのだろう。いたいけに強姦から逃れようとしていた千紗だが、義弟の肉棒が余さず股座に埋め込まれているのを見て、緊張の糸が切れていた。

非力ながらも全力で抵抗していたため、千紗の息は途切れがちであり、ほっそりとした喉は大きな起伏を繰り返している。白い鎖骨にはうっすらと汗が浮かび上がり、動悸の乱れた心臓が熟れた巨乳を昇降させた。

（こんな儂い千紗義姉さんの顔、一度だつて見たことがない）

どんな苦境に立たされても美しい佇まいを崩さず、智也の前では羨望の的でありつづけた三十二歳の未亡人。夫が夭折しても人前では涙を見せず、凜とした気高さを顕示していた兄嫁。

そんな義姉が義弟にレイプされ、か弱い女の素顔を晒してしまっている。

敬愛する麗女も一人の女であるという確かな実感。

畏敬の象徴でもあった兄嫁が己の肉棒によってただの女に堕ちた事実、智也の中に隠れていた牡の暴虐が野蛮な喜びを貪る。

「あつ、ひう……やつ、智君、動かないでっ」

股座に吹き溜まる黒い悦びが、自然と智也に性の挿抜を促す。仰向けになった千紗に覆い被さり、蜜壺に沈めていた剛直をゆっくり抜き出していく。

横に押しのけられていたショーツが摩擦無く肉茎を滑った。剛直に付着していた淫らな泡が、裾に縫われたレースによって刮ぎ落とされていくのが心地良い。

とろりと糸を引く淫蜜が含有していたフェロモンを揮発させ、より牡の理性を狂わせていく。肉幹に絡み付いていた甘い贅肉が、ねっとり快感の航跡を描いて離れていた。

甘ったるい痺れが肉根に流れ落ち、子胤のたっぷり貯えられた精囊がぶるぶると悦ぶ。

「くっ、んんっ。智君のおちんぼ、こんな大きいなんて……ん、ああんっ」

高く張った雁首が淫唇を捲り上げる寸前で、漲った巨根を膣路へとずっぴり嵌め込

む。折り重なっていた無数の腭肉を散らし、蜜浸しの甘壺を男の肉槍でしっかり切り裂いていく。喪服から露出していた女の下腹が、性悦を浴びて艶めかしくうねった。喉から迫り上がってきた快感を途中から嘔み殺そうとしたのだろう。千紗は皓歯を結び、喉を「くふん」と鳴らした。

未亡人の涙ぐましい努力に相反し、大学生の性棒はより緻密に硬度を増していく。(やった……千紗義姉さんでも、僕のちんぽが大きいって感じるんだ)兄の逸物に馴らされていた兄嫁だけに、正直言って智也は己の肉棒がどれだけ未亡人の蜜路を満足させられるのか、幾何かの不安があった。それだけに、千紗が漏らした一言は牡としてのプライドを陶酔に浸らせる。

股座から黒い情炎が燃え上がり、口の中に溢れ出した大量の唾液を呑んだ。

欲望に突き動かされるままに、卑猥なピストンがねつとりと淫獄の始まりを告げる。「ほら、動くよ千紗義姉さん。しっかり僕のちんぽを鎮めて」

千紗を眼下に据えたまま、智也は強姦の続きを告知する。男女の股座が密着しては離れ、卑猥な蜜糸を垂らした。牡の卑肉と牝の媚肉がグチュグチュとまぐわい、男女の淫液が攪拌され鼓膜の爛れる水音が室内に吐き出される。

膣内を往復する鈴肉に思い切り穢れた血を流し込む。鈴肉が丸く膨張し、雁首が肉

の傘となって大きく開いた。卑肉の凶器を作りあげると、智也は膣肉を削り取るようにぐちゅぐちゅと蜜洞を抉る。

(温かくてヌメヌメして……ああ、千紗義姉さんのまんこの感触……犯している感じが堪らない)

女の身体を内部から喰い荒らしていく、牡だけに与えられた特権。極太の肉槍で女を串刺しにする悦びに、智也の全身が恍惚に悶える。

巨根だからこそ出来る冠絶した性戯をまともに浴びせられ、未亡人は「あぁんっ」と一際甲高い嬌声を上げた。

「と、智君抜いてっ。今ならまだ……あぁっ」

「男がこんな興奮しているのに途中で止められないってことくらい、人妻の千紗義姉さんだったらわかるはずだよ」

「それ、は……」

どんな紳士だろうと、一度獣欲に支配されてしまえば後は牡の衝動のままに女体を求める。いくら尊敬していた兄といえど、セックスの真っ只中にあつては凶獣と化し、愛しい妻を一心不乱に貪ったのは想像に難くない。

智也の指摘通り思い当たる節があったのだろう。抗弁を試みる千紗だったが、凶星

だったらしく、何一つ有意な言葉は紡げず視線をそむけて言い澀む。

「勿論、止めはしないけれど千紗義姉さんを乱暴に抱く気はないよ。よがり狂うくらい気持ち良く犯してあげるから」

「わ、私はそんなこと望んでいないわ。あつ、ひいんっ」

みっちりと股間を重ね合わせたまま、智也は腰を使わずにゆりと円を描く。鈴肉で子宮口を蹂してやるだけで、兄嫁の声帯から前言を否定せんばかりの艶鳴きが爪弾かれた。

（何て色に濡れた声なんだろう。耳が逆レイプされているみたいだ）

自らの意思とかけ離れた嬌声に恥じ入ったのか、千紗は慌てて紅唇を掌で覆う。当人としては痴態を隠蔽する所業なのだろうが、生憎と智也にとっては牡の嗜虐を炙り立てる挑発にしか映らない。

（僕のちんぼで、千紗義姉さんが感じてるんだ）

何より、自分の男根によって年上の美女が悶える様が堪らない。極上の熟女から更なる艶鳴を響かせるべく、智也は勇壮に腰を振るった。

「あつ、ひっ……んんっ。やつ、とも、く……ああんっ」

肉の豪槍をずっぷりと沈め、鋭利な裏筋で甘肉を薙いでいく。ふやけた蜜襞を肉茎

から浮き上がった血管で剥ぎ、張り出した卑傘で外へ外へと引き摺り出した。

亀頭の輪郭が見え隠れする位置で再び膣内へと剛直を埋める。垂直に割れていた淫唇が、太い肉柱によって涙滴形へと拡張される。卑傘によって掻き出された牝汁が、不揃いの気泡を立てて会陰にとろりと伝う。

にちやにちやと鼓膜に絡む淫靡な水音が沸き立ち、穢れた泡が破裂するごとに濃密な牝の匂いが発露する。智也の本能が鼻孔をひくつかせ、男を狂わす淫香が氣道を灼いて肺に燻った。

「千紗義姉さんって嘘が下手だね。望んでないって言いながら、エロ汁垂らしてまんこぐちゃぐちゃにしている。本当は、セックスしたくて仕方なかったんじゃないの」
「んふっ、ち、違うわっ。セックスなんてずっとしてなかったから、身体が慣れてなくて……あつ、くうんっ」

智也は上体を起こし、自由になった両手で兄嫁の熟乳を驚掴みにする。膣襞が螺旋を描きながら肉棒を搾り上げた。一際濃厚な悦美が股間を疼かせ、鼻孔が熱い吐息と共に大きく開いた。

「本当かな。年下の僕がちよっとちんぼ突っ込んだだけで、まんこは言うまでもないとして、乳首だってこんなコリコリになってる。千紗義姉さんって、本当は凄くエッ

チだったんじゃないかな」

「うう、それは……だって……あつ、ああんっ」

これだけ乱れてしまえば身体が慣れてないなどという言い訳も通用しない。かといって、過度に感じやすい身体ではないと断じれば、今度は自分よりずっと年下の義弟によって簡単に弄ばれていると自白するに等しい。

それを見越し、智也は意地の悪い問いを投げかける。逃げ道を封じられた千紗は、案の定言葉に詰まり、氣勢を揺らがせてしまう。息を乱して周章する兄嫁の姿は、まるで袋小路に追い詰められた小動物宛らだった。

「エッチなおっぱいなのに、とても可愛らしいね」

これだけ鮮やかに色付き、豊かな乳丘でありながら、乳輪は小さく初心^{うぶ}な処女を思わせるほどに淑やかだ。

兄嫁の胸部に実るまろやかな熟房に深く指を沈める。溶け落ちそうなほど柔らかな乳肉を掌で弄び、温かな膨らみを賞翫した。

悦美によって染め上げられた乳首をそつと親指の腹で押し潰す。次いで乳肉に沈んだ突起を円錐になるまで搾り上げ、充血した先端を軽く爪で引つ搔いてやった。

「ひっ、あんっ。駄目、弄っちゃ……あんっ」

一定の律動で熟果を爪弾くと、智也の指に連動して三十二歳の肢体がビクリと身悶えする。女の肌理がざわめくたびに温かな膣壁がねつとりと肉棒を締め上げ、男の下腹に甘く蕩ける官能を沸き立たせた。

快感を耐えようとしたのだろう。千紗の臍が僅かにへこむと、艷脂に覆われていたあばらが女の肌へ微かに浮かび上がる。

兄嫁の一举一動は、可愛らしくも艶めかしい。年上の女が意のままに乱れる様が牡の獣欲を轟々と焚き付け、抽挿される猛腰も自然とペースが上がる。

「あつ、んんっ。激、し……智君、もつとゆつくり……んっ、あつ」

「無理だよ。千紗義姉さんのまんこ、これまでエッチしたどんな彼女よりも気持ち良いんだ。抑えられるわけないよ」

喘ぎを交えて千紗が自重を促してくるが、そんなものは検討にも値しない。過言ではなく、性交を持った女の中で兄嫁は群を抜いて優れている。

容姿は今更語るまでもないが、千紗は牝としての抱擁力も格別に高い。男の昂ぶる獣柱を柔らかに包み込み、股座を根本から溶かす快楽を鈴口から逆流させてくる。

本能で牝の肉欲を悦ばせながらも自身も牝の愉悦を浴び、艶を振り乱すことで男の自尊心と征服欲をも励起する。

男の身体と心を狂わせる義姉が相手では、セックスのイニシアチブを握るのも困難だ。油断すれば即座に絶頂へと狂奔しそうになる牡腰を、男のプライドにかけて手綱を握る。

「こんな最高のセックスをしたら、もう二度と他の女なんか抱けないかもしれない。千紗義姉さんの身体、エロ過ぎだよ」

「そ、んな……あつ、ん、私の身体なんて……ん、チュ」

美辞麗句に装飾せず、剥き出しの欲望で未亡人を褒めちぎる。智也は起こしていた上体を屈ませると、自らの媚体を否定しようとする熟女の唇を塞いだ。

仄かに酒の香りが溶け込んだ甘い涎の味は甘露に等しく、一滴も余さず飲み干したくなる。押しつけた胸板に、硬く凝った乳首が擦れるのが心地良い。三十路の熟れた女体の感触を皮膚から通じて堪能する。

「んっ、クチュ……あぶっ、やつ……んぷっ」

唇をしばらく愚直に重ね合わせた後、舌肉を根本まで滑り落とす。涎塗れになっていた紅唇は苦もなく男の舌を許してしまった。甘い女の唾液に浸っていた三十二歳の舌を絡め、殊更猥雑に蹂躪してやる。ぐちゅぐちゅと乱れくぐもる水音を攪拌させ、千紗の口内に大量の泡を生み出した。

まろやかに湿った口内の空気が、男の口腔を通じて鼻孔に逆流する。熟女の甘い唾液が、嗅覚をも魅惑の陶酔に導いてくる。

紅唇の端から、押し出された涎がこぼりと噴きこぼれた。粘性を帯びた泡は室内の灯りを照らし、ふしだらな煌めきを反射させる。

「んんっ、ぶ、はっ……ああ、智君。おちんぼ、くつつけちゃ……ああんっ」

濃密なキスによって兄嫁の口内を蹂躪し、舌戯の快感を湧出させていた智也だが、熟れた媚膺を愛翫するのは忘れてはいない。いきり立っている猥棒を引き延ばした愛嬢にみっちりと嵌め込んだまま、腰で螺旋を描いて女芯をじつくりと躡る。

（これが千紗義姉さんの子宮口……）

自慢の逸物で義姉の媚宮に触れ、子を宿す揺籃を確かめる。目で見えることは叶わなくても、感触から千紗がまだ余裕をもって生殖を行える性器だと、男根を通じて牡の本能が読み取る。

（千紗義姉さんは、子供ができなかったんだよな）

背徳の快楽を堪能しつつ、兄嫁の肢体をまさぐる。肩から二の腕にかけて指を這わすと、瘦せ過ぎもしなければ怠慢な贅肉も付いていない、しつとりと媚脂を湛えた女肌の感触が伝う。

シーツを必死に握る爪は艶やかに輝いており、三十二歳の身体は頗る健全であることが素人目にも解る。豊かな熟乳は男を魅惑するだけではなく、妊娠すれば潤沢な母乳を搾れるに違いない。

「ああっ、やんっ……お尻……はぶっ、んふっ」

何より、蠱惑の稜線を描いた安産型的美臀が堪らない。むっちりとした艶肉を宿したふとももから続く、母体として理想の下半身。

仮に千紗が兄の子を産んでいたとしたら、さぞかし壮健に育っていただろう。

（千紗義姉さんは兄さんの妻だ。でも、この子宮は——）

自分の逸物で弄り倒し、鈴肉と淫らなキスに耽っている女の聖域は、まだ孕んだ経験を持たない処女だ——。

「やっ、おちんぽが大きくなって……あっ、ダメッ。ひっ、ああんっ」

これまでどんな女と交わった時でも惹起したことのない、明瞭たる生殖欲求が萌芽した途端、鈴肉が更に大きく膨張した。一気に蜜壺が広げられ、子宮が甘く圧迫されたのだろう。千紗は一段と甲高く艶鳴き、色に彩られた肢体を大きく痙攣させる。

無数の蜜嚢が一斉に牡槍に絡み付き、竿肉を根本からぎゅうぎゅうと締め付けてきた。

（僕が、千紗義姉さんをイかせた……アクメさせたんだ）

兄嫁から法悦の言質を取るまでもない。

断続的に繰り返される荒い呼吸。

焦点を失い悦楽の霧中に没した虹彩。

紅の唇からは小さな気泡が混じるだらしない涎が垂れ、反り返った白い喉にはじつとりと玉の汗が浮かんでいた。

憧れの未亡人を自らの怒張で法悦に堕とせた悦びが、牡の劣情を昂ぶらせる。

「僕のちんぽでイッたんだね。千紗義姉さん」

「はあ……はあ……私……智君、に……」

注ぎ込まれた性悦が余程鮮烈だったのだろう。女体を席卷する淫熱によって魔された兄嫁は、焦点を拡散させた瞳で朦朧と義弟を見つめてくる。

だが、その虹彩は明瞭に智也を見据えたものではない。義理の弟に人妻の操を奪われた禁忌すら、今の千紗には理解できていない。ディープキスによって麻薬さながらの悦美を味わいながら、女の芯たる子宮を徹底的に詰られたのだ。

なまじ男日照りが長かっただけに、エクスタシーの波が津波となって千紗の意識を押し流したのは明白だった。

「ん……はあ……あつ、ひつ……と、智く——ああんっ」

法悦に蕩けた女をじっくりと愛でるのは、智也にとってセックスで最も好きな時間の一つだ。己の逸物で女体を掻き回し、肉悦に屈服している姿を見るのは、牡としてこの上ない優越感に浸れる瞬間でもある。

「千紗義姉さんはもうイッたんだからさ。今度は僕を満足させて貰うよ」

生憎と、智也にとつてこのセックスは特別だ。千紗は遊びで抱く女とは違う。智也が何年も前から理想としていた、決して触れられなかった高嶺の花だ。

全力で抱き、隅々まで穢したいと欲望したからこそ、悠長に女のイキ顔を眺めているだけに留まるはずもない。

「お、お願いっ。おまんこ、おかしくなってるから、突くのはやめっ——あつ、んうっ」

法悦の余韻が色濃く残る女体に力強く牡腰を叩き付けると、千紗は容易に二度目のエクスタシーへと駆け上る。むっちりとした艶脚がぶるぶると柔らかに震え、足袋にくるまれた足先がキュツと丸くなる。

「くうっ、最高のハメ心地だよ千紗義姉さん。アクメ締めが凄すぎて、ちんぽが融かされちゃいそうだ」

千紗に引きずり込まれる形で絶頂に至りそうになり、智也はきつく射精欲を縛り付ける。鼓膜から音が消え去るほど強く奥歯を噛み、括約筋が引き千切れかねない勢いで肛門を締め、暴発しようとする子胤を抑圧する。

我慢の代償として莫大な量の先走りが出し、鈴口からとろとろと垂れ流された。

「しばらくイキツ放しになるかもしれないけれど、千紗義姉さんの子宮にたっぷり生胤注ぎ込むためだから、頑張ってくれるよね」

「子宮って……えっ、あつ。だ、駄目よっ。コンドームしてないのに、射精なんて——あひっ」

酔いによる判断力が著しく低下していたためだろう。千紗は義弟からのレイプを恐れるあまり、避妊具を用いない生交合をしていたと今更ながら気付いたらしい。

この期に及んでは何もかも遅すぎる。肉悦に蕩けきった女体はもう無為な抵抗すら覚束無く、非難の声は精矛をみつちりと掻き回すだけで簡単に霧散する。

「お願い智君、中だけは許してっ。ここだけは、犯しちゃダメなのっ」

「デキるデキないなんて考えるより、もう少し自分の身体を労ってあげなくちゃ。千紗義姉さんの子宮、僕の子胤が欲しいってずっとおねだりしてるじゃない」

膣の最奥を鈴肉で数回小突いてやると「んんっ」と狂悦の苦悶と共に千紗がシート

を握り締める。未亡人の忍耐とは対象的に、牝として熟れた子宮口は若人の精悍な鈴口をちゅうちゅうと甘噛みした。

未亡人の意思から乖離した牝の本性が、じゅるりと男の淡精を舐める。尿道孔に堪っていた先走りが啜られた。

智也は獣が伏せるように足指をベッドに食い込ませ、快感の奔流に流れまいと意識を踏み止まらせる、

「僕の大切な千紗義姉さんが、こんなエッチに飢えていたなんて知らなかったよ。でも、大丈夫。キンタマが空になるまで、たっぷり生出ししてあげるからね」

「い、いや……やめ、智——あひいっ」

千紗の最後の希望を、智也は柔らかな微笑みで踏みにじる。密着していた上体を離して女の蜂腰をがっしり掴むと、猛然と怒張を叩き込んだ。

女を悦ばせる突き込みではなく、男が絶頂に至る獣の打ち付け。股座に浮かんだ汗が微細に飛び散った。黒い清逸を帯びた喪服が、卑猥に染まりふしだらに乱れる。

千紗の女体を内側から穢すための情欲は、かつてない昂ぶりを智也の股座に燃え立たせる。

「千紗義姉さんのまんこも中出しされたくて待ち侘びてるって感じだね。ちんぼをガ

ンガン子宮にぶつけているのに、こんなだらしなないエロ顔してるなんて」

「ああっ、見ないでっ。こんなは破廉恥な顔、見たら駄目なおっ」

智也の牡肉は巨根であるが故に、女によっては凶器に等しい。事実、まだセックスに不慣れな頃は、子宮にまで余裕で届く肉竿は相手に苦痛を与えてしまった。

その反動で、智也は女を徹底的に蕩かす術を磨いた。経験の浅い女を法悦を与えられるのだから、未亡人たる千紗なら尚容易だ。褻路はおろか媚宮すら快楽にふやけた女体は、雄渾な男槍で串刺しにされて悦びに鳴く。

「もっと素顔を見せて、千紗義姉さん。綺麗な顔の裏に隠していた牝の本性を、僕に見せるんだ。ほらっ」

女の柔腹に親指を沈ませ、一際深く牝の股座を叩き付ける。鈴肉で子宮を突き上げ、膣越しに腹の中を掻き回すと「あひいっ」と牝鳴きした千紗が半狂乱に美脚をばたつかせる。

愛液と淡精が混じり合った穢泡が、淫らで背徳な交合によって次々に生み出される。それら情欲の産物は高速の抽挿によって無限に分割され、濡れた股座に叩き付けられ無数の飛沫へと形を変える。

「ああっ、駄目っ。私、イクッ。智君に犯されてるのに、またイッチャう。いやら

しく鳴いちやうっ」

「イツて良いよ、千紗義姉さん。義弟にレイプされてアクメするんだっ」

人生最高の射精を行うため、野獣の腰振りに最後の発破がかけられる。肉棒には満遍なく卑猥な交合汁が纏わり付いているが、熾烈な抽挿によって燃え上がらんばかりに熱くなっている。

欲塗れの血が野太い管を浮き上がらせ、牡の象徴をより禍々しく彫り上げた。どつぷりと子胤を溜め込んだ重々しい精囊が、肉の砲身へと据え付けられる。

沸騰寸前の熱汁が股間で禍々しく流動し、破裂の瞬間を待ち侘びていた。

「イクッ。智君のおちんぼで、千紗……ああっ、イクッ」

肉悦に打ちのめされた兄嫁が、耐えきれずに法悦へと堕ちる。智也に与えられたアクメの中でも最高の悦楽を得られたのだから。精を請い蠕動する蜜肉は貪欲に肉槍へと絡み付き、熱烈で淫靡な抱擁が尿道を締め上げる。

「射精するよ、千紗義姉さんっ。ああっ、出るっ」

肉鈴が、千紗の子宮口がくぱりと開いたのを感じ取る。牡の本能がその瞬間を見計らい、煮え滾った子胤汁を解き放った。睾丸が股間にめり込まんばかりに収縮し、十代の荒く若々しい精液が一気に輸精管を流れる。狭苦しい尿道が膨大な胤汁によって

拡張され、半開きになっていた鈴口が限界まで孔を広げた。

「ううっ、飲めっ。子宮で飲むんだっ——おおっ！」

義姉であることも脳裏から吹き飛び、智也は狂った獣欲の赴くままに己の穢望を叩き付ける。鈴肉を子宮口へとめり込ませ、膣には一滴たりとも零さないように蓋をした。その上で、濃縮された精汁を兄嫁の揺籃へとぶちまけた。

最も勢いのある一射目を子宮の底へと浴びせかける。続く射精で未だ子を為した試しの無い処女同然の媚宮を牡の欲望で充たしていく。

「ああっ、熱いっ。お腹が灼けちゃうっ。んっ、ああっ。いやあっ」

灼熱の胤汁を女体の奥底に浴びせ掛けられ、アクメに溺れながら千紗が狂ったように手足をばたつかせる。暴れる牝を押さえ付けるため、智也は上体で覆い被さり、四肢を絡めて女の身体を拘束する。生殖衝動の赴くままに行われたそのやり方は、交尾を嫌がる牝に強引な胤付けを敢行する、野蛮な牡そのものの姿だった。

「あっ……ん……出され……ちやっ……智君に……ああ……うう……」

最高の肉悦と最悪の業罪を注ぎ込まれた女は、法悦に堕ちながら双眸から涙をこぼす。

快楽と悔恨に苛まれた美しい兄嫁。

その乱れた貌は、男に壮絶なほどの嗜虐心を掻き立てる。

「これで終わりじゃないよ。千紗義姉さん」

まだ、淫らな狂宴は始まったばかりだ。

憧れの美熟女を一度犯した程度では、十九歳の強欲はまるで勢いを衰えない。

射精を行った肉茎は萎むどころか生出しの興奮でより硬くなり、精囊からは次の子胤が早くも溜め込まれる。

義弟が未だ獣に狂ったままだと臆肉を通じて知り得てしまったのだろう。千紗は小さな悲鳴を漏らしたが、悦美に麻痺した声帯はか細い吐息を漏らすだけだ。

「何回でも何度でも犯すよ。千紗義姉さんの子宮が僕のちんぼしか考えられなくなるまで、アクメ地獄を味わわせてあげるからね」

柔和な微笑みを浮かべた智也は、千紗の頬を流れる涙をぬらりと舌で舐め上げる。

狂獣と化した智也の豪腰が止まり、牝と化した千紗の嬌声が途絶える頃には、既に夜は白み始めていた。

二章 真昼の情事 エプロン姿の未亡人

天に掲げられた秋の陽光が、レースのカーテンを暖かに透かしている。

時刻は十時に差し掛かるうとしていたが、隙あらば屋内をサウナにしようとする目論んでいた夏の陽射しと異なり、この時間になっても部屋の中は仄かに暖かい程度だ。

僅かに開かれた窓からは、網戸の隙間を縫って涼やかな微風が流れ込んでくる。肌にしっとり絡む、酷暑とペアを為していた湿気も今や皆無であり、爽やかな大気がフローリングの床を洗っていく。

特別用事が無くとも外に出たくなる、心地良い秋の空だった。

「はあ……」

そんな朗らかな気候とはまるで正反対の――宛ら、濁った溜め池に沈殿する腐泥の

如き溜息が、智也の口から吐き出される。

（僕は……千紗義姉さんになんてことを……）

昨晩と変わらぬＴシャツ姿のまま、ベッドの縁に腰掛け顔面を両手で覆う。

夜明け近くまで千紗を犯し抜き、精も根も尽き果たした智也は、爆睡によって意識が刷新された後、ようやく取り替えしのつかない過ちを犯した事実に向き合っていた。

心身を蚕食していた酒精が完全に消え去り、幾多の射精によって性欲が著しく下火になった今、背理の狂宴で食った快絶は底の見えない悔恨へと変わっている。

色と艶に塗れた荒淫の刻は、自身の醜い渴望を映し出した悪夢となり、絶望と化した現実を知らしめていた。

（どんなに謝ったって、許されることじゃない）

酔いに加勢され理性が吹き飛んだ末に兄嫁を強姦したわけだが、最悪なことに智也はその際の言動をおおよそ覚えていた。

まるで自分に一切非が無く、すべて千紗が牡の獣性を唆せたのだと言わんばかりの腐りきった正当化は、思い出すだけで壁に頭蓋を打ち付けたくなる衝動に駆られる。

（血の繋がってない僕を、ずっと可愛がってくれたのに）

千紗が愛したのは兄の正隆だ。それなのに、義弟である智也を実の家族同然に愛護

してくれた。正隆は当然として、千紗が居たからこそ今日の智也が在るといっても過言では無い。

亡き兄の家に居候している智也にとってみれば、千紗が唯一残された家族とも言える。そんな恩義の塊に等しい麗女に、智也はレイプという最低最悪のやり方で仇を為してしまった。

（千紗義姉さんだけじゃなくて、義姉さんとの繋がりも失う）

原田家にこそ住んでいるわけではないが、義弟が出来たと喜んでくれたもう一人の義姉の顔が脳裏を過ぎる。同居こそしてないものの、千紗とは異なるアプローチを用いて誰よりも智也を可愛がってくれた玲奈。

そんな二人目の義姉といえど、実の姉たる千紗を凌辱した義弟は決して許さないだろう。

（家族の縁を切られても、僕には何も言う資格が無い）

否、義姉達だけではない。目をかけてくれていた親戚一同とて、智也が強姦魔だとわかれば一切の縁を絶つだろう。小河原家の敷居を跨ぐことはおろか、二度と千紗や玲奈に会うことも許さないうちに違いない。

（二人の義姉を失うなんて……）

いずれ訪れる因果応報の喪失が、智也から血の氣を引かせる。十二歳から数え、七年間で培った義姉弟の絆がたった一度の過ちによって引き千切られるのだ。

兄を除けば、千紗と玲奈は智也の思い出の大半を占めている。その姉妹と決別しなくてはならないのは、あまりにも辛い。それこそ、肉体をもがれるに等しい苦しみだった。

（千紗義姉さんに……謝らなくちゃけない）

智也は顔を覆っていた掌を膝に押しつけ、大きく頤を反らせた。天上を見据えて滂沱しそうな涙を堪えると、頭を振って立ち上がる。

どれだけ暗澹たる未来が待ち受けていようと、智也は紛れもない加害者だ。後悔し悲嘆に暮れるのは勝手だが、より心に傷を付けられたのは被害者たる千紗である。

その千紗に相対せずして罪悪感に苛まれるのは、屈折した自己陶醉でしかない。

どのような結果になろうとも、まずは誠心誠意謝罪するのが、今の智也が為すべきことだ。

（まずは、顔を洗わなくちゃ）

寝癖のついた髪を乱雑に梳き、ベッドから腰を浮かせた。

部屋のドアを開け、二階廊下の隅にある洗面所へと向かう。蛇口から捻り出した冷

水を肌叩き付けた。掌で拭うように顔面を洗い、心身共に引き締める。

ハンドタオルでしっかりと水気を吸い取らせ、化粧鏡の前に置かれていたヘアウオーターを軽く吹きかけ、寝癖を一掃する。悔恨と罪の意識に染まった青黒い顔に、僅かばかりだが血の氣が戻った氣がした。

足早に自室へ戻り、じつとりとした寝汗を吸い、昨晚の情香が染み込んだTシャツを脱ぎ捨てる。合わせてハーフパンツも積み上げると、クローゼットラックからアーモンドカラーのスラックスと無地のワイシャツを手にする。

無個性で嫌味の無い服に四肢を通すと、壁に掛けられた姿見の前で襟を正す。

（よし）

まともな風采になったのを確認し、両の頬を強く叩いた。パンツと乾いた音が室内に響き、次いで鈍い痛みが顔面に走る。この場から逃げ出そうと試みる懦弱な精神が、殴打の喝によって静まり返った。

最後に肺に籠もっていた空気を深呼吸と共に入れ換え、自室を出て階下へと赴く。

（千紗義姉さん、逃げたりしないだろうか……いや、それ以前に扉を開けてくれるだろうか）

階段を下りながら、毒牙にかけてしまった義姉を脳裏に思い描く。

しつかりと面前で膝を折り、額を床に付けて土下座する所存だったが、そもそも千紗がまともに相対してくれるという保証は何処にもない。凌辱者たる義弟を見た瞬間に逃げ出す可能性もあるし、最悪の場合自室に籠もって姿さえ見せてくれないかもしれない。

（考えて見れば、僕が千紗義姉さんに謝るのって……これが初めてかもしれない）

なまじ智也は十二歳で千紗と会っているため、幼子特有の利かん坊ぶりで千紗の手を焼かせた経験がない。おまけに大好きな兄嫁を困らせたくないがため、手のかからない『良い子』として中学・高校生活を歩んでいたため、非行はおろか反抗期すら皆無だった。

成績も常に上位だったので褒められた思い出は多々あるが、その逆はない。

（落ち着け。静かにしろ）

千紗に初めて頭を下げる緊張に、心臓が大きく脈を打つ。階段を一步下りるごとに心音が著しく乱れた。両足が怯懦に凝固し、重心が下腹から大きく傾く。咄嗟に手摺りを掴み、階段を踏み外すという失態を回避する。

（保身に逃げるな。千紗義姉さんのために腹を括れ）

自分の行動が誰のために、何のために為されるのかを再認させる。義姉から拒絶さ

れる恐怖が腹の底で渦を巻くが、これまで抱いていた敬慕が虚ろな狂騒を抑制する。手摺りに張り付いた腕を真っ直ぐに伸ばし、曲がってしまった背筋を正す。二回だけ深呼吸をして復調の兆しを確認すると、一歩ずつ足裏で階段を踏みしめつつ降りていく。

「あっ——」

千紗の部屋に赴くまでに意思の乱れを無くしておけば良い——そんな智也の考えは、一階に降り立った瞬間に粉碎されることとなる。

伸びた廊下に合わせて身体を九十度右に回した先に、会うべき義姉が立っていた。

それも、手を伸ばせば届くほどの至近距離にある。

突然目の前に人影が現れて驚いたのだろう。千紗は「きゃっ」と小さく悲鳴を上げ、咄嗟に半歩後ろに下がった。

（千紗義姉さん……なんでこんな所に）

兄嫁以上に驚愕したのは智也である。昨日、明け方近くまで女体を犯し抜いたのだ。てつきり心身共に疲れ切り、部屋にいるどころか未だベッドで魔されていてもおかしくないと考えていただけに、まさかこんな所で遭遇するとは思いもしない。

動揺から立ち直りかけていた心は再びぐらつき、平常の地盤が揺り動かされる。

（本当に……僕は千紗義姉さんを犯した……んだよな）

千紗が凌辱の痕跡を在り在りと浮かばせていたら、智也もここまで周章しなかったに違いない。しかし、目の前にいる義姉はあまりにも平素の姿そのままだった。

これといって目立つデザインではないものの、艶やかで麗しい肢体を描き出す臙脂色のニットワンピース。まだ肌寒さには程遠いが、黒いストッキングが穿かれているのは、脚肌を無為に冷やさない為であろう。

秋物のルームウェアの上からは、これまた見慣れた白いキッチンエプロンが掛けられている。ベッドで乱れ流れた長い黒髪は花を模したバレッタで一つに結わえられ、ニットワンピースに漆黒の滝を流していた。

麗姿と喪服が合わさり、何処かこの世ならざる幽玄な美しさを醸し出していた昨日の風采とは異なり、そこには何時もと変わらない家庭的な義姉がいる。

（何を当たり前のことを……馬鹿みたいなことを考えているんだ）

忌まわしき記憶そのものに疑念を抱いた自分を強く戒める。

あの淫辱は紛れもない現実であり、智也は元凶そのものだ。目をそむけなくなる事実を噛みしめ、翻意しかけた意思を無理矢理縫い止める。

「ち、千紗義——」

「おはよう。智君」

そんな俄作りの意思は、数秒と経たずに離散を余儀なくされる。

冷厳さすら漂う美貌からは想像が付かない、ふわりと優しい微笑み——。

智也が一目惚れし、そして永久に失われたはずの笑顔が、何時もと変わらぬ日常としてここに在った。

「ふふ、いきなり目の前に出てきて来たから、びっくりしちやった」

ニットワンピースを盛り上げる豊乳に手を載せ、兄嫁は安堵の息を吐く。そんな未亡人の素振りを目にする智也の胸中では、混乱の暴風が吹き荒れていた。

（どうして、千紗義姉さんはこんな表情を……）

強姦の最中、美しい義姉は愁眉を歪めて泣いていた。人妻の貞淑を穢され、近親相姦の禁を犯され、信頼していた伴侶の弟に裏切られたのだ。

相對すら忌避し、侮蔑を込めて罵り、蛇蝎の如く嫌われてもおかしくはない。

呪詛に等しい非難を浴びる覚悟をしていただけに、あの凌辱の夜など無かったとばかりに代わり映えの無い千紗の笑顔に、智也は完全に出鼻を挫かれていた。

「今から起こしに行こうと思っていたけど、丁度良かったわ。ちよつと遅くなっちゃったけど、朝ご飯にしましょう」

混乱の渦中にある智也とは関係無く、千紗は小さく微笑みくると踵を返す。

エプロンに隠されていた美脚の全貌が露わとなり、黒ストッキングに彩られたふくらはぎが網膜に輪郭を描いた。

「あ、あのっ。千紗義姉さん、昨日は——」

このままでは謝罪の覚悟そのものが崩落してしまう。焦った智也はとにかく千紗に足を止めて貰おうと、届かぬのを承知で離れていく女肩へと手を伸ばした。

「ああ、そうだ。智君、昨日は迷惑かけちゃったみたいね。ごめんなさい」

「えっ——」

まるで掌が触れたかのように、千紗が歩みを止めて振り返る。しかし、罪を償うべき相手から逆に謝意を示され、智也は益々混乱した。

「昨日の法要に玲奈が来たところまでは覚えてるんだけど、気付いたら自分の部屋で寝ていて……運んでくれたの、智君でしょう？」

「う、うん……でも、僕だけじゃなくて、義姉さんも手伝ってくれて……」

事実を述べているだけなのに、口調は限りなく言い訳がましい。妹の名も飛び出てきたからだろう。智也の周章に気付くことなく、千紗は「そう、玲奈にも」と小首を傾げた。

「後であの子に電話で謝らなきゃ……やっぱりお酒を飲むとダメね。すぐ眠くなっちゃう。施主だったのに、智君にはだらしなないところを見せちゃって、ごめんね」

「い、いや、そんな気にしないでよ。施主だったんだから人一倍疲れるのも当然だし……義姉さんも労ってくれていたし——」

年上として、義姉としての矜持が、自身の失態によって傷つけられたのだろう。謝意に混じって、千紗が深く溜息を吐く。

動揺しつつも義姉の暗鬱を払拭しようと試みる智也だったが、けたたましく鳴り響くキッチンタイマーが邪魔をした。魚の脂が焦げる香りが、うつすらと廊下にまで漂ってくる。

「さあ、遅くなっただけ朝食にしましょう。テーブルを拭いて、お箸を並べてくれるかしら」

場を仕切り直すように、千紗が小さな苦笑を浮かべて歩みを再開する。義姉に促される形となり、のろのろと智也も追従した。

（千紗義姉さんが……僕にレイプされたことを覚えていないなんて）

食卓に機械的な動作で食器を並べながら、智也は呆然と千紗の言を反芻する。泥酔の末に記憶を失う者がいることは友人知人を通じて理解している。

昨晚、千紗が酔い潰れていたのは玲奈も知るところであるし、廊下で発見した時
まだ酒精は抜けていなかったのは明らかだ。

（でも……忘れていなくても、言わなくちやいけない……告げなくちやいけない）

胡乱な手付きでテーブルを拭きながら、智也は自らの蛮行を鬱々と思い返す。喩え
千紗が忘れていても、快楽と肉欲の赴くままに義姉を凌辱した光景を脳裏に焼き付け
ている。

敬愛する兄嫁を穢した罪は白昼の下に引き摺り出し、罰しなくてはならない。

（千紗義姉さんに出しまでしてるんだ……もし、万が一のことがあったら……）

こんがりと焼けたイボダイの身を背骨から削ぎ落としつつ、智也は最悪の事態を考
える。幾度と無く兄嫁の子宮に向けて放たれた子胤は、量も濃さも莫大になる。それ
こそ、危険日だとしたら確実に妊娠しているだろう。

未亡人の貞操を穢しただけではなく受精までさせてしまったらと想像するだけで、
まともに食事が喉が通らない。

「いつもより、随分とゆっくり食べているけれど……あんまり美味しくなかった？」

「い、いや。そんなことないよ千紗義姉さん」

憂いと悩みを顔に出していないつもりだったが、自身が気付かないうちに食事を摂

るペースは著しく遅滞していたらしい。まだ手付かずだったほうれん草の播り胡麻和
えに慌てて箸を伸ばす。

「千紗義姉さんのご飯にはいつだって美味しいよ。ただ、お酒の影響がまだ残ってい
るみたいで、ちよつとぼんやりしてたみたい」

実際、千紗の生家は老舗の料亭ということもあってか、出される料理はどれも極め
て美味だ。少なくとも、智也は今までに兄嫁の手料理を残した記憶は一度も無い。

その卓絶した技量もあって、千紗は料理教室を開いており、小さいながらも盛況な
のだ。そんな料理が不味いはずがない。

仮にそういった肩書きが無くとも、千紗がいつも丁寧な調理をし、智也のために手
間暇をかけて食事を作ってくれていると知っている。

兄嫁の厚意に応えるためにも、猫がそっぽを向くほど綺麗に焼き魚を骨にし、胡麻
粒一つ残さず副菜を平らげる。智也の健啖ぶりに千紗は目を丸くし、その後くすりと
微笑んだ。

「良かった。智也君に美味しいって言って貰えると、作り甲斐があるわ」

優しく、柔らかで、男なら誰もが心を奪われるであろう美しい笑顔。

あまりに愛しく輝かしい義姉の微笑みは、智也の胸中に激しい葛藤を惹起させる。

（忘れてゐるのに……わざわざ思い出させるのが、本当に千紗義姉さんのためになるのか）

夫である正隆が逝去した後、千紗の表情は精巧な陶器を彷彿とさせる硬く、虚ろなものに変わった。長い時間をかけ、ようやく千紗は柔らかなで温かい微笑みを智也に零してくれるようになった。

傷心からやつと立ち直りつつある兄嫁に惨劇の記憶を伝えれば、千紗の笑顔は再び失われるだろう。伴侶を亡くした悲しみと喪失から這い上がってきた未亡人を、突き落とすはめになる。

（欺瞞だ。そんなこと……僕が千紗義姉さんに嫌われないための言い訳に過ぎないじゃないか）

千紗への配慮は卑しい保身を背景にしたものだ。何より、膺内射精したのだから、万が一受胎してしまえばその時点で智也は自由をせざるを得なくなる。妊娠が発覚した後には凌辱の事実を伝えれば、千紗はより深く傷つくだろう。

それでも、このまま口を噤んでいれば何事も無く平穏な日常が送れるのではないかという、醜悪で魅惑な妄想が鎌首をもたげてくる。利害を測る天秤を見据え、智也は決然たる対峙と薄汚い逃避の狭間で懊悩した。

（逃げるな。僕はもう、子供じゃない。大人として、千紗義姉さんに贖罪をするんだ……逃げるんじゃない）

食卓に肘を乗せ、智也はシンクに立つて食器を洗う義姉の背中を凝視する。

純粹な敬愛と十九年の間に培って来た倫理が、早く席を立つて千紗の前に行けと責め立てる。片や平穏への未練と千紗から忌避される怯懦が、足裏をフローリングに貼り付ける。

智也が苦悶を続けている最中、食器を洗い終えた千紗がしなやかな繊指から水を切り、未使用のフキンを片手に取る。

「最近はずっと雨だったけれど、今日はいいいお天気になったから沢山洗濯物が干せそう。智君も昨日着ていたTシャツとか出して置いてね」

「あ、うん。わかっ——」

それは、この家で家事を一手に引き受けている千紗としては、何の当たり障りのない義弟への頼みだったのだろう。日常のやりとりで溶け込んだ微かな違和感が智也の応答に待ったをかける。その言葉の痼りは即座に至みへと変貌を遂げ、薄氷の如き日常に大きな亀裂を走らせた。

「千紗義姉さん——」

あれほど事態の進展を拒んでいた身体が、簡単に腰を浮かせる。千紗に事実を告げる目的でもなく、淫辱の惨禍を隠匿しようとするわけでもなく、新たに生じた動機が智也の足をキツチンへと運ばせる。

「うん？ どうかした？」

背で応じながらも兄嫁の仕事は遅滞しない。慣れた手付きで白い平皿を挟み、フキンを介した纖手が反時計回りに陶磁器から水滴を拭っていく。

「僕がTシャツを着ていたのは、法要が終わって家に帰った後だよ」

千紗の手から平皿が滑り落ち、けたたましい音がシンクから叩き出された。

〈体験版終了〉